

紅衛兵新聞とその詩歌の輪郭

王，家平

岩佐昌璋

九州大学大学院言語文化研究院文化情報学部門・比較言語文化学

溝口，喜郎

九州大学大学院比較社会文化学府：博士課程

<https://doi.org/10.15017/6796438>

出版情報：言語科学. 39, pp.115-131, 2004-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



紅衛兵新聞とその詩歌の輪郭*

王家平 著

岩佐昌暲／溝口喜郎** 訳

〔解題〕

本文は、王家平『紅衛兵詩歌研究—「瘋狂」的繆斯』五南圖書出版公司（台北）、2002年3月、の第1章「紅衛兵「小報」及其詩歌基本面貌」（1-16頁）の全訳である。

プロレタリア文化大革命（1966-76年）の初期、「紅衛兵」を名乗る学生グループが運動の主役として登場し、「実権派」といわれた政治、経済、文化の諸領域の指導者たちを激しく批判・攻撃し、彼らを失脚させる大きな力として働いたのはよく知られた事実である。文革は日本では毛沢東派と劉少奇—鄧小平派の政治的実権をめぐる権力闘争として報道され、紅衛兵運動についても権力闘争に利用された運動という見方が一般的である。そのため、彼らが展開した運動を「文革の中でどういう政治的役割を果たしたか」という視点から論じるものは多かったが、運動が含んでいた文化的側面を論じようとするものはほとんどなかったように思う⁽¹⁾。

だが、実は紅衛兵運動は、暴力的な武闘や激しい政治的論戦だけではなく、文学や絵画、舞踊などといった「文化」をその運動の中から生み出していた。しかし、そのような「文化」の実態がどんなものであったかは、中国でも十分に明らかにされているとは言いがたい。それだけに本書の試みは貴重なものと言わなければならない。と同時に、本書が大陸ではなく台湾で出版された（より正確には、台湾で出版するほかなかった、というべきかもしれない）という事実、文革自体の研究がまださまざまな（研究者の側の自己規制も含め）禁忌や制約の中でしか展開されていない中国大陆の実情をうかがうことができる。

王家平の『紅衛兵詩歌研究』は紅衛兵運動の中で夥しく発行された新聞（「小報」とよぶ）や雑誌に発表された紅衛兵の詩歌作品の研究書である。私の知る限り、これま

* 本稿は文部科学省科学研究費特定領域研究（A）「東アジア出版文化の研究」の平成15年度公募研究「中華人民共和国の非公然出版物における文学資料の研究」の研究成果の一部である。

** 九州大学大学院比較社会文化学府博士課程

⁽¹⁾ そのわずかな例に、王明賢「紅衛兵美術運動」、吾遠「「六億神州尽堯舜」—文革後期絵画的主題」などの論文がある。いずれも劉青峰編『文化大革命：史実與研究』中文大学出版社（香港）1996年、に所収。

で紅衛兵詩歌を扱った専論には、楊漢雲「紅衛兵詩歌概説」『衡陽師專學報』1998年1期、があるが、それは紅衛兵詩歌の主題分類を主としたもので、論として王家平の周到緻密であるのには及ばない。文革期文学全体を見渡した著作に、楊健『文化大革命』があり、精密にこれを論じたものに王堯の諸論文がある⁽²⁾。それらが中国にいて文革期文学研究という領域を確立した著作だとするならば、王家平は本書で紅衛兵詩歌研究について同じことを成し遂げたといえ、今後の文革期文学研究の起点となるだろう。なお、岩佐にもやはり紅衛兵小報に資料を採った『紅衛兵詩歌選』がある⁽³⁾。

本書の構成は以下のようである。

引 言／紅衛兵運動的興衰

第1章／紅衛兵「小報」及其詩歌基本面貌

第2章／造反與崇拜：紅衛兵群体人格内在撕裂

第3章／紅衛兵詩歌的神話原型

第4章／清教唯美與救世聖戰

第5章／節日慶典與廣場狂歡

第6章／套語式寫作與象徵型詩歌

結 語／紅衛兵詩歌研究：僅僅是一個開端

付 録／紅衛兵詩歌代表作4首

翻訳した第1章は全体の総論であり、紅衛兵詩歌の基本的な特徴とその発表舞台たる小報の簡明なまとめとなっている。翻訳にこの個所を選んだ所以である。

なお、小見出しは岩佐が便宜上加えたもので原書にはない。著者の注は原書通り文末に一括して掲げた。訳注は（＊1）のように示し、読者の便を考えて各頁に脚注として掲げたほか、簡単な語釈の類は〔 〕で括って本文中に入れてある。本文中に（ ）で括られた説明は原文の通りである。

著者の王家平は1965年浙江省生まれ、現在首都師範大学文學院副教授。92年北京師範大学で修士を終えた後、99年北京大學に提出した「1966～1976年中国詩歌研究」で文学博士の学位を得た。その学位論文のうち、紅衛兵詩歌の部分をまとめたのが本書である。

共訳者の溝口喜郎は、文革期文学研究をテーマに博士論文を執筆しようとしている。本訳文は（詩を除く）溝口の訳に岩佐が手を入れ、訳注を補って定稿とした。最終的な文責は岩佐にある。

（2004年1月8日）

⁽²⁾ 楊健や王堯の所論の解説を含む、中國大陸における文革期文学研究の歴史と現状については、拙著『文革期の文学』言語文化叢書Ⅶ、九州大学言語文化研究院、2003年3月、第2章「中国における文革期文学の研究状況」を参照されたい。

⁽³⁾ 岩佐昌暉、劉福春編『紅衛兵詩選』中国書店、2001年3月。

紅衛兵新聞の創刊

夜明け近くのそのとき／一つの大隊が新聞売りに出発した。／刷り上がったばかりの新聞はインクのにおいがいっぱい／戦士の心臓も、激しくふるえた！

どんなに多くの人々が造反派の新聞を待っていることか／どんなに多くの人々が「劉少奇、鄧小平、陶铸打倒」の材料を読みたがっていることか／新聞が一枚一枚人々の手から手に渡り／造反派の声が町のここ彼処に飛び交う！

革命的造反新聞、「俺に3枚くれ！」／「10枚くれ、おつり、いらねえよ！」／「気をつけろ、後ろから誰かが監視してるぞ！」／「今度うちの工場に来るときにはもっとたくさん持ってきてくれ！」……

なんと親しみのこもった言葉だろう、／なんと多くの人々が熱心に手招きしてくれることか／あの情のこもったひとりひとりの瞳から／町の人びとと我々の心が一緒に鼓動を打っていることがよく感じられる！

ああ！これは一枚一枚新聞を売っているなんてものではない／世界の新聞売りにこんなに誇りを感じる者がいるだろうか！／草色のズックの学生鞄に詰っているのは／紛れもなく中国のフルシュチョフ〔劉少奇国家主席〕に向けられた大砲だ！¹

この詩歌は文革期の重要な文化現象—紅衛兵新聞^{(*)1}、およびその他の造反派大衆組織の新聞の、広範な出版と伝播の状況—を描写している。これは当代中国出版史における特殊な一ページである。中華人民共和国成立後、特に、私営の新聞、出版業が改造された後、大新聞も小新聞もみな各級の党組織が掌握する党の機関誌となった。毛沢東は、文化大革命を発動するため、「公然と、全面的に、下から上へ、大衆を立ち上がらせ、我々の暗黒面を暴露」²し、運動の開始と同時に紅衛兵などの大衆組織に「大鳴、大放、大字報、大弁論」^{(*)2}の「四大自由」を与えた。この中には新聞・出版の自由、すなわち、すべての大衆団体、組織が、自身の願望に基づいて自身の新聞を創刊、編集、発行することのできる自由も含まれていた。

1966年8月22日、毛沢東が紙名をつけた新聞『新北大』が創刊され、全国で初めて出版発行された紅衛兵新聞となった。つづいて、「首都大專院校紅衛兵革命造反總司令部」^{(*)3}（略称は『三司』）が発行する『首都紅衛兵』が1966年9月13日に創刊された。北京大学とともに「北京五大紅衛兵基地」と称されたその他の四つの大学も、1966年

(*)1 原文は「小報」。タイトルは「紅衛兵新聞」としたが、以下の訳文ではそのまま「紅衛兵小報」あるいは「小報」としている。

(*)2 大鳴＝大いに見解を述べる。大放＝大胆に意見を発表する。大字報＝大字報を貼り出す。大弁論＝大弁論を行なう。「四大自由」は1975年には憲法にも取り入れられたが、80年9月全国人民代表大会で削除された。

(*)3 「大專院校」は総合大学、単科大学、高等専門学校の総称。

末に自身の紅衛兵新聞、すなわち、清華大井岡山兵団の『井岡山』、北京師範大井岡山戦闘団の『井岡山』、北京航空学院紅旗戦闘隊の『紅旗』、北京地質学院東方紅公社の『東方紅報』が創刊された。上海、天津、西安、広州、沈陽、成都など全国各地の大学、中学紅衛兵組織も1966年後半期に続々と自身の新聞を創刊し、1967年にピークに達した。これらの新聞には活版刷り、ガリ版刷りがあり、版面にも大小あったが、主流だったのは八開型小版式^(*)である。また、これらの新聞の多くが3、4人の小さなグループによって創刊されたため、これらの新聞は通常、「小報」と呼ばれた。

『中学文革報』の場合

紅衛兵小報の創刊、編集、発行には、随意性、機動性という比較的大きな特徴がある。紅衛兵組織は、一定の編集・発行人員と、一定の資金や印刷機、紙、場所、運搬道具などの物質条件がありさえすれば、一つの新聞編集部を立ち上げることができた。文革初期に、遇羅克の『出身論』^(*)を掲載し全国にその名を轟かせた『中学文革報』は、その典型的な例の一つである。

1966年12月末、北京四中^(*)の学生牟志京は、西城区の西什庫の電柱に貼り付けてあった、「北京家庭問題研究小組」の署名で書かれた「出身論」というガリ版刷りを見つけた。読み終わるとすぐさま共鳴し、そこで、ガリ版稿に書かれていた連絡住所を手がかりに、六十五中の遇羅文（遇羅克の弟）を探しあてた。二人は話してみても意気投合し、『出身論』を活版刷りのビラにして広く宣伝することとした。牟志京は四中総務室から500元を借り、さらに、クラスメートを通して紅衛兵「三司」宣伝部に行き紹介状を書いてもらい、解放軍1201印刷工場を訪ね印刷の話を決めた。しばらくして、『出身論』の組み版が完成し、八つ切り紙（B5版）の3ページまでができあがった。残りの1ページ分を埋めるために、牟志京はこれを新聞にしてやろうと考えた。四中の国語教師であった毛憲文に顧問となって新聞編集の知識を教えてくれるよう頼んだ。さらに、やは

(*) B5版の小型新聞。

(*) 遇羅克は1942年生まれ。その論文「出身論」が反革命文書とされたため逮捕、70年処刑されたが、文革後の79年名誉回復された。彼の生涯は妹の作家・遇羅錦の「乾坤は特に重く、我が頭は軽し」（安本実、竹内久美子訳『ある冬の童話』田畑書店、1986年12月所収）に詳しい。「出身論」は、中華人民共和国成立後の中国社会に生き続けた出身階級決定論。1949年の時点での職業や階級を基準に決められた「階級成分」や解放後の政治運動の中で貼りつけられたレッテルが一種の身分として固定され、それがその人間や子供、家族の運命に影響を与えた。例えば親が資本家、地主、右派などであると、その子供や家族は著しい社会的差別・政治的不平等を強いられた。封建的な血統論であるが、これを批判した遇羅克が反革命とされたのは、逆に党幹部の子供や家族はこの出身論を根拠に大きな特権を享受できたから、それを批判するのは現実秩序の批判になったためである。

(*) 北京第四中学。大学進学率が90%を超える名門校で、高級幹部の子弟が多かった。陳凱歌著、刈間文俊訳『私の紅衛兵時代』講談社現代新書、1990年6月、に文革前後のこの学校のことを記す。「中学」は一般には日本の高校に相当。

り紅衛兵新聞『首都風雷』の編集者朱維理に、毛沢東手書きの文字の中から、「中学文革報」という新聞名に使う字を集めてもらった。その中の「文」という字は『解放軍報』の「放」の字の右部分から取ったものだった。創刊時の「中学文革報」は、編集部にたった3人のメンバー（牟志京、遇羅文、王建復）しかいなかったが、それにもかかわらず、「首都中学生革命造反司令部宣伝部」編集発行、という立派な名前をつけていた。

1967年1月18日、『中学文革報』創刊号が正式に出版発行された。「北京家庭出身問題研究小組」の名義で発表された遇羅克の『出身論』が初めの3ページの主要な部分を占めた。1、2ページの上端には毛沢東が青年問題を論じた語録を載せ、3ページ目の左下の約500字のスペースは、『靈魂の見分け方を論じる』という雑文で埋めた。4ページ目には3編の文章と、文革の動向に関する2組の「参考情報」を掲載した。これらの文章と情報はすべて「聯動」（首都紅衛兵聯合行動委員会）に対抗して書かれたものであり、『中学文革報』が「三司」造反派紅衛兵に近く、「聯動」の「老紅衛兵」^{(*)1}とははっきり対立する発行方針の傾向にあったことを示している。

『中学文革報』は、出版の翌日から大きな社会反響を呼び、編集部には大量の読者が訪れた。このことは、対立派の恨みを買って、北京大学附属中学紅衛兵のリーダーだった彭小蒙は百人あまりを率いて編集部を襲撃した。だが、もっと多くの紅衛兵組織が自分たちの小報に文章を掲載し、「出身」問題について『中学文革報』と論戦を展開した。『中学文革報』が引き起こした論争は政治上層部の関心を引いた。「中央文革小組」の一員だった戚本禹^{(*)2}が『出身論』を名指しで批判したことによって、『中学文革報』は第6期（1967年4月1日）をもって停刊に追い込まれた³。1966年12月末から1967年1月18日まで、一ヶ月にも満たない短期間の内に、まったく新聞出版の経験を持たない3、4人の中学紅衛兵が一つの新聞を準備し、計画し、編集し、出版したという、『中学文革報』のこの創刊過程は、文革初期の紅衛兵小報の、短[刊行期間の短さ]、平[内容の平易さ]、快[刊行の早さ]^{(*)3}、の特徴を典型的に物語っている。

紅衛兵新聞の特徴一政治性

人々がまず注目するのは、やはり、これら小報の政治的派閥性であろう。どの小報も

(*)1 一般には1966年8月18日（毛沢東が初めて紅衛兵を接見した日）以前に成立した初期の紅衛兵を指す。彼らは清華大学付属中学など名門中学に在学する党・国家の高級幹部の子弟を主体とし、「連動」のメンバーでもあった。彼らは立ちあがるのが早かったので後発の紅衛兵に対し強い優越感をもち、また文革の攻撃目標が幹部（自らの父母）に向けられることへの強い反発を抱いていた。そのため、江青ら中央文革小組やそれを後ろ盾とする首都大專院校紅衛兵革命造反総司令部（三司）と対立し、多くが逮捕されて組織は壊滅した。

(*)2 文革中、中央文革小組組員で「愛国主義か売国主義か」など重要な論文を書いた。68年解放軍の文革を扇動したとして失脚。

(*)3 「短、平、快」はもともと中国バレーボールチームが相手チームのすきについて攻撃する方法を言った語。ここでの訳語は大体のものである。

「創刊宣言」以外に、さらにその組織の政治的見解、対立派閥と論戦する政治的文章、および、さまざまな「修正主義」の観点を批判した理論文章を大量に発表、詳述した。こうして一定の言論自由の空間が提供された。遇羅克の『出身論』はまさに『中学文革報』によって全国に急速に広まったものである。しかし、こうした言論の自由にはやはり無制限ではなかった。『中学文革報』は、先に異なる意見を持つ大衆組織に襲撃され、後には「中央文革」から名指しの批判を受け停刊に追い込まれたが、それがこのことをよく示している。

これと同じく目を引くのは、こうした紅衛兵小報がどれも「中央指導者の『最新指示』」を大量に掲載していた点である。このことは文革期の「党の指導」の特殊な方法を体現するものだった。つまり、毛沢東と彼の指導下にある「中央文革小組」、即ち当時のいわゆる「プロレタリア司令部」は、各級党組織と国家行政機構を飛び越えて、新聞雑誌を通じて大衆と直接結びつき、その戦略部署と意図を貫徹していたのである。ここで言う新聞、雑誌とは、主に、当時「中央文革小組」が直接掌握していた「兩報一刊（二つの新聞一つの雑誌）」（具体的には『人民日報』、『解放軍報』、雑誌『紅旗』）を指すが、各大衆組織（特に「中央文革小組」に支持されていた大衆組織）の小報も、「中央指導者の精神」を上から下へ伝達する役割を担った。この意味から言えば、文革期の紅衛兵小報も体制の枠内にあり、通常言われるような、政治圧政期に政府に対して対抗的な態度を取った「地下刊物」⁴と比較すると、性質において異なるものである。

紅衛兵新聞の流通の仕方

もちろん、紅衛兵小報と国家が正式に出版した新聞とを比べてみれば、やはりそれ自身の特徴を備えている。中でも重要な点は、その特殊な流通方法である。本章の冒頭に引用した詩が描いているように、紅衛兵小報は通常、新聞の編集・出版者（あるいは所属するメンバー、さらには専門的な「販売分隊」）が街へ出て新聞を売るという流通方法を取り、直接、読者と交流し対話を行った。この詩に描かれた、新聞編集者と読者との互いの感情と思想の交流は、少なくとも当時であってはいずれも真実だった。かつて王府井大街で『中学文革報』を売ったことのある編集者兼作者だった人物は次のように当時を回想している。

『中学文革報』を争って買う時ほどの熱烈な場面を私はそれより後、見たことがない。人々は龍のように長い行列を作って、握りしめた金を高く差し上げて、押し合いへし合いしていた。買うことのできた人はまるで宝物を手に入れたかのようで、買うことのできなかった人は悔しくて仕方なさそうだった。ある人は定価の25倍の高値で譲ってもらっていた。人々が新聞を買う時のあの切実な表情は、彼らが真理の声を探し求めているのだということを私に告げていた、……」⁵。

『中学文革報』の編集者が巨大な政治的圧力に抗って、耐えず封建的な「血統論」に立

ち向かうことができたのは、おそらく、街頭の「真理の声を探し求めている」読者の、彼らに対する精神的、道義的な支持と関係があるだろう。

値段・発行部数 当時の紅衛兵小報には価格が安く、発行量が多いという特徴がある。『中学文革報』は一部 0.02 元、毎期の発行量は 3 万から 6 万部の間であり、この数字自体少ないものではないが、『兵团戦報』、清華の新聞『井岡山』など「中央文革小組」の支持があった新聞の印刷部数はさらに多く、これらは通常、每期 50 万部を発行することができた⁶。

紅衛兵新聞の公認

紅衛兵小報は最初は勝手に創刊し勝手に売る自由発行の形が主であった（『新北大』などは例外である）、後に紅衛兵組織の影響力が日増しに増大してくるにしたがって、彼らが発行する新聞は公的な認可を受け、郵便局でも公に発行されるようになった（*1）。清華大学の新聞『井岡山』は、1966 年 12 月 1 日の創刊時には自主発行に属す小報だったが、1967 年 2 月号から郵便局の責任発行に改められ、毎月 6 期の出版、定価は 0.12 元となった。同様に、清華の新聞『井岡山』も、上海、広州、杭州、西安などに航空便版印刷所を設立し、新聞の発行量を急速に拡大させた⁷。北京師範大の新聞『井岡山』は 1966 年 12 月 9 日の創刊時は自由発行の配布方法を取っていたが、1967 年 4 月 18 日第 31 期から北京市郵便局が代理販売し、全国に向けて公に発行された⁸。『首都紅衛兵』は当時非常に有名な紅衛兵小報であり、1966 年 9 月 13 日に北京紅衛兵「三司」から創刊された。1967 年 3 月 3 日に「紅 1 号」として改めて出版され、署名も「首都大專院校紅代会〔紅衛兵代表会議〕」発行に改められた。1967 年 5 月 1 日の「紅 15、16」合併号より、全国にむけて公に発行された⁹。

初期新聞の内容

報道と暴露 紅衛兵小報の記事欄は多彩で、内容も雑多だったが、概して言えばすべての小報が一つの変化の過程をたどった。早期の各種小報の基本的任務は文革の動向を報道することだったが、それは二つの基本的内容を持っていた。

その一つは、自組織あるいは兄弟組織の「革命的壮挙」を報道することである。例えば、『新北大』の「北大紀事」の欄は、北京大学の紅衛兵が燕園〔北京大学キャンパス〕を暴れ回り、「四旧」を大いに打ち壊した状況について報道し¹⁰、北京師範大の「井岡山」は、本校の井岡山戦闘団 200 名あまりの紅衛兵が山東省の曲阜で孔子像を焼き払い、孔子の墓を掘り返し平らにしたことを報道している¹¹。

（*1）当時の中国では新聞は郵便局経由で購読者に配達された。雑誌も書店でも販売されたが、郵便局で販売、定期購読者には郵便局から配達された。

二つ目の内容は、対立する派閥の、私設監獄や、武闘参加などの暴力行為を暴露することである。例えば、「西糾」（西城区糾察隊）紅衛兵が北京六中に設けた労働改造所で人命を殺傷し、人血で壁に「赤色テロル万歳」と書いたという類の暴力行為の報道¹²、西安の「赤色テロ部隊」が、いかに監獄を私的に設け、婦女をいたぶり汚したかに関する報道¹³、湖南大学の二つの対立する紅衛兵組織が、互いに相手の殺人の罪を暴き出した、血なまぐさい描写¹⁴、などである。

政治論文の掲載 第二段階になると、紅衛兵小報は大量の政治論文を掲載するようになる。これらの文章は気宇壮大で戦略を語っているように見えるが、実際には、大部分が、運動の勢いをかさに他人を抑えつけようというもので、理論的説得力に欠ける横暴な紋切り型の文章である。もちろん、その一方で遇羅克が『中学文革報』に発表した『出身論』などの論文もある。これらの論文は文革期思想界の喜ぶべき収穫であり、思考することに真摯であった少数の青年たちが、真理を守り、人間の威厳を守るために、あえて主流イデオロギーに抗弁しようとした独立精神の品格を備えている。

文学系新聞の出現

1967年夏、文革政治運動が始まってすでに1年が過ぎた。この時期、紅衛兵小報では「宣言」式の文章が次第に減少し、政治論文の比重も減少し始めたが、その一方で、短く、よくまとまった、さまざまな種類の文芸作品の量が増大した。これはこの段階の紅衛兵小報における注目すべき現象である。多くの小報が続々と、漫画、歌曲、雑文、詩歌および演芸作品を掲載し、文芸の形式を用いて「燃えさかる」文革の現実生活を迅速に反映し、戦闘に対する広範な「革命小将」(*1)の激情を歌い上げた。一部の小報の改版本は、紅衛兵各派組織が文芸作品を用いて現実生活の消息を反映することを重視し始めたことをはっきりと示している。

例えば、中国作家協会造反派が出版した『文学戦報』は、1967年8月20日に掲載した「読者に告ぐ」という短文の中で次のように述べている。

「『文学戦報』は3月23日の創刊以来、これまで25期を出版した。『文学戦線』が近々創刊されるため、『文学戦報』のもともとの任務（大批判政治論文を発表することを指す—引用者[王家平]注）は『文学戦線』が引き継ぐ。したがって、次号から『文学戦報』は創作の発表を主とし、文芸の形式を用いて、プロレタリア文化大革命時代の新たな相貌を反映することにする。」¹⁵。

改版前の『文学戦報』は、主に、劉少奇、鄧小平、陶铸を批判する政治論文、周揚、邵荃麟を批判する文学理論、映画『武訓伝』、小説『劉志丹』などの「大毒草」を批判す

(*1)「小将」は「小勇将」。勇ましい子供への誉め言葉だが、当時ではもっぱら紅衛兵を指す語として用いられた。

る文芸評論を主としていた。改版後は、多数の詩歌、雑文作品を発表し、文革期の比較的専門化された文学系小報となった。

「地上文学」としての紅衛兵詩歌

楊健が著した『文化大革命中の地下文学』¹⁶所収の「長篇紀実報告」は、紅衛兵小報に発表された詩歌を「地下文学」の範疇に入れて論じているが、筆者の考えでは、これはあまり適当ではない。大量の紅衛兵小報が自由出版発行から公の発行へと続々と変更されたことはここでは言わないにしても、例えば、自由出版発行を堅持していた小報であっても、先に述べたように実際には体制の枠内に入っていた。ある種の文学（詩歌）現象が、「地上文学」に属するのか、「地下文学」に属するのかを判断するには、それがどのような伝播方法で社会に流通したのかではなく、それが公的なイデオロギー、芸術政策、審美趣味に対して、同調、迎合したのか、それとも、そこから離れ、反抗的態度を取ったのかをまず見なければならない。全体的に言えば、紅衛兵小報の詩歌は、基本的には文革イデオロギーと審美趣味との産物であり、国家出版物に掲載された詩歌とそれほど大きな違いはない。したがって、本書では、それらを「地上詩壇」として論じる。

紅衛兵詩歌の諸相—その特徴

紅衛兵詩歌は紅衛兵運動の高まりにつれて誕生した。大量の紅衛兵小報の出現は紅衛兵詩歌に発表の舞台を提供し、多くの詩歌作者隊列を育成した。紅衛兵詩歌が誕生した開かれた空間が、紅衛兵の叙情態度を内在的に制限していた。紅衛兵小報の独特の生産過程、流通経路、読者群が、紅衛兵詩歌の執筆方法、伝播ルート、消費（閲読[読み]）状況に深く影響していた。

朗誦のしやすさ 最初の紅衛兵詩歌はすべて広場、街頭などの大衆的空間で創作され、あの時代の民衆の共同の感情を歌い上げている。大部分の作品が即興に属し、「順口溜」の特徴を持っている（*1）。

紅旗ひらめく／人の海 歌の浪／何千万もの両手が挙がり／何億もの人が声をそろえて歓び歌う／万歳万歳 毛主席、偉大な舵手が方向を示す。¹⁷

熱狂性 紅衛兵詩歌は、文革初期の熱狂化した社会生活の雰囲気に応じて生まれ、かつ、その「広場の熱狂」という特徴をあますところなく体現した特殊な詩歌タイプに属している。

（*1）「順口溜」は民間芸能の一つで、話し言葉で韻をふむ、軽快なテンポの語りである。「順口溜」の特徴をもつ、とは「なめらかで通俗的で朗誦しやすい」意である。

いいぞ！いいぞ！／ホントにいいぞ！／臨時革命委員会／一千回でも／一万回でも大声でおまえのために大声でいいぞと叫ぼう。¹⁸

アジビラの言語表現 紅衛兵詩歌の作者の大部分は、広場に立って宣言や檄文を発表するという態度、言語方式で、情感を歌い上げている。

山城〔重慶の美称〕に向かって大声で叫ぶ／四百万の革命大衆よ／山城に向かって雄叫びを挙げる／革命的労農兵同胞よ／……ああ、四百万の革命大衆よ！／ああ、革命的労農兄弟よ！／毛沢東の旗印の下に団結せよ／つつこめ！つつこめ！つつこめ！／修正主義の頭目たちの犯罪的な悪の宮殿に向かって突撃だ！¹⁹

詩歌の行動性

先に述べたように、紅衛兵小報は、通常、作者・編者と読者との直接の交流という伝播方法を取り、さらには、街頭、広場で小報の文章、詩作を大声で朗読することさえあった。その結果、激しい争論を引き起こすか、あるいは強烈な情感の反応を生むことになった。一部の紅衛兵組織はさらに自分たちの詩作に音楽、踊りをまぜて広場で演じた。

1967年5月29日、北京101中学の「老紅衛兵」は紅衛兵誕生一周年を記念するために、天安門広場で『紅衛兵組歌』を上演した。組歌は14首の詩からなり、紅衛兵運動の歴史的進展過程を全面的に表現している。その中の一つ、「開場詩」（序詩）は次のように書かれている。

戦いの太鼓が響く／烈火が燃え上がる／関（とき）の声があがる／軍旗が赤くはためく。／天を衝く霹靂は鬼神も泣かせるほど／英雄的な紅衛兵が出陣する／古い学制をたたき壊し／黒い一派をやっつけて功を立てる／党が造反の骨をくれたのだ／舌鋒剣のごとく殺気みなぎる。／主席自ら戦旗を下さったのだ、／若き勇将は高らかに東方紅を唱う。²⁰

詩歌の扇動性—広場の芸術

こうした詩を読むと、紅衛兵組織の創始者である清華附中紅衛兵が書いた三回の論文『プロレタリア革命造反精神万歳』を自然と連想する。この組詩は紅衛兵の詩化された宣言書であり、その作者、表現者および観衆はすべて同じ経歴を持つ老紅衛兵だった。さらに、江青らから老紅衛兵の歴史を否定されたために²¹、当時、彼らは共通して政治上の大きな圧力を感じていた。この時、彼らが同じ広場の空間で、表現し耳を傾けていたのは自分たち自身の「造反歌」だった。ここに感情の共鳴が起きていたということは推察することができる。これはまさに紅衛兵詩歌の基本的な特徴を最もよく反映、説明している。つまり紅衛兵詩歌は、一種の広場の詩歌芸術だったのである。

かりに、「消費—読みの過程では、機能的消費と文学的消費の二つの状況を区別しなけ

ればならない」²²とするならば、紅衛兵広場詩歌の受容は明らかに「機能的消費」に属している。それは一種の政治的な「機能消費」である。これらの詩が読者（観衆）に提供したのは、基本的には社会や政治の情報とイデオロギー的理念であり、これらの詩が読者（観衆）にもたらしたのは、政治的情熱の発散であって、対象と距離をおいた審美的なよろこびではなかった。紅衛兵の広場詩歌においては、こうした政治的「機能消費」とその作者、表現者、読者（観衆）の青春の激情とが渾然一体となっている。したがって、紅衛兵の広場詩歌は政治叙情詩^{(*)1}の形式を必然的に取ることになったのである。紅衛兵の広場詩歌は現代中国の政治叙情詩の伝統と内在的な関連を持っている。しかしその一方で、文革期における広場での紅衛兵政治叙情詩は、鮮明な時代的特徴を備えてもいる。最も主要な特徴は、こうした広場詩が詩の政治的消費機能を極端にまで進めたことである。すなわち、詩歌の執筆、読み、表現が、ある種の政治行為を構成していることである。

1967年5月29日に天安門広場で行われた広場詩歌の上演は、実際には老紅衛兵の政治的大示威運動だった。本章が冒頭で引用した詩が描いた「売報」行動のように、これもまた政治的行動だったのである。それは厳格な「小分隊」組織を持つとともに、明確な政治的目的—中国のフルシチョフ〔劉少奇〕を砲撃し、「江城〔武漢の美称〕に新しい夜明けの到来」を迎える—を持っていた。読者の反応もまた「政治的」なものだった。対立派組織の「尾行」もあったが、共感者、支持者からの心からの庇護もあった。それゆえに詩の作者は「これは一枚一枚新聞を売っているなんてものではない／世界の新聞売りにこんなに誇りを感じる者がいるだろうか！」と誇らしく書いているのである。

朱自清^{(*)2}は40年代の学生運動に出現した朗読詩の特徴を総括した際、その「行動性」を強調した。「それは単なる態度表明にとどまらず、さらに一步進んで、行動することあるいは活動することを要求している」²³。紅衛兵の広場詩歌においては、朱自清の言う朗読詩の「行動」は、直接的な政治的行動となり、しかもその行動はしばしば政治的暴力と結びついていた。文革期、全国各地に広く伝わった紅衛兵詩歌の代表作『放してくれ、母さん！』は次のように書かれている。

放してくれ、母さん！／子供のために心配しないでくれ。／どこにでも俺達の戦友がいる／暴徒の長矛など何でもないよ！／……さようなら、母さん！／我々の最高指導者毛主席が／俺にすぐに出発しろと命じている！／階級闘争の広い戦場は自由に馳駆できるんだ／家

(*)1 洪子誠（北京大学教授）によれば「政治抒情詩」とは「詩のもつ宣伝扇動の働きを重視し、理想と激情の表現を主とする」詩歌で「豪壮、激越の色彩をその特徴とする」（洪子誠『当代中国的芸術問題』北京大学出版社、1986年8月、184頁）

(*)2 朱自清（1896—1948）詩人、散文家。清華大学中文系教授。五四運動以後の中国現代詩の総括である『中国新文学大系・詩集』『導言』（35年）を書いた。

や劇場でどうして駆け回ることができる？／俺達の勝利の知らせを待っていてくれ、母さん！／いつかきっと、赤旗の下で団欒できるよ／文化大革命の徹底的な勝利を勝ち取るために／誓って歴史に身をささげ家には帰らない！²⁴

多くの紅衛兵小勇将は、まさに『放してくれ、母さん！』のような詩を声高に歌いながら階級闘争の「戦場」へと向かっていったのである。『放してくれ、母さん！』は激しい政治的扇動力を持っていたために、全国各地に広がっていく過程でさまざまな「修改本」が現れた²⁵。紅衛兵の各組織は、異なる段階の異なる政治闘争の必要性に基づいて、しばしばこの詩を書き換え、新たな内容を盛り込んだ。確かに詩歌の「戦闘の武器」（『批判の武器』と『武器の批判』を結び付け）の役割を極限にまで発揮させた。

詩歌の集団性

朱自清は朗読詩の特徴を論じた際、さらに、これは「大衆の詩、集団の詩である。執筆者は個人だが、彼の出発点は大衆にあり、彼は単に大衆の代弁者にすぎない」²⁶と述べた。紅衛兵の広場詩歌も、朱自清が見て取った朗読詩の「集団性」の特徴を極端へと進めている。先に述べたように、紅衛兵小報は大部分がある特定の紅衛兵組織によって作られたため、比較的鮮明な派閥的傾向が見られる。紅衛兵小報詩歌の作者は時には一人でなく、数人、あるいは組織全体のメンバーだった。多くの詩歌が用いたのは、ある組織の集団ペンネームであり、こうした詩歌は執筆グループによる集団創作の産物だった。1967年12月26日、毛沢東の誕生記念日にあたり、新北大公社の紅衛兵が結成した「向日葵」創作組は、この日の『新北大』に抒情長詩『紅太陽頌』を掲載した。

果てしない大海原よ／激しく波打つ心を励ましてくれ／聳え立つ高山よ／激情に筆を振るわせてくれ：／天をとどろかす春雷よ／雄々しい太鼓の音を響かせてくれ：／万里の長風よ／『東方紅』を奏でてくれ。／さあ声を合わせて唱おう／我々の心の中の最も紅い最も紅い真っ赤な太陽／—毛主席を！……²⁷

この詩に使われている人称代名詞の「我々」は、紅衛兵詩歌の集団執筆の状況を鮮明に示している。また、一部の詩は、執筆グループの手によるものにもかかわらず、詩の人称代名詞には単数の第一人称を使っている場合もある。例えば、「野草地」紅衛兵小組が著した詩「戦士の話」は次のように書いている。「私は一人の青年学生、／私は紅旗野戦軍の兵士。／いや、違う。私は一発の徹甲弾、／常に砲身の中で働いている！」²⁸ この詩の主語である「私」は決して個体を指す言葉ではなく、「我々」を表すもう一つの表現方法なのである。

もちろん、もっと多くの紅衛兵小報詩歌は個人署名の作品であるが、一人の個人が書

いた作品でも、個性的特徴に欠けているものが往々にして見られる。例えば、次のような少数民族の造反派によって書かれた詩がそれである。

畚家〔少数民族のショー族〕は心に毛主席を思う／山歌は太陽に向かって歌う／毛主席のバッジを胸に付けば／昼も夜も胸の内が温まる。²⁹

この詩の叙情主体は、「壮家〔チワン族〕」なり、「侗家〔トン族〕」なり、あるいはその他の少数民族に置き換えることができる。そして、感情を訴えかける対象もまた、「劉〔劉少奇〕主席」なり、「華〔華国鋒〕主席」なり、あるいはその他の指導者に置き換えることができる。詩の叙情主語と目的語を任意に置き換えられるということは、この詩が根本的に個性に欠けた詩であること、また、この種の詩歌の執筆は個人名義で書かれた「集団式」の執筆にすぎず、操作性のかなり強い「常套句式」の執筆であったことを説明している。この点については、別の章でさらに具体的に論じることにする。

詩歌に対する反応

朱自清の次の観点は、我々が紅衛兵詩歌を認識するうえでの一つの示唆を与えている。朱は、「集団の詩」にとって、最も「重要なのはその雰囲気」である。その雰囲気を離れてしまえば「詩となることができない」。それが表現しようとする感情は「張りつめた集団の現場において」実現する。「書かれた詩を単純に読めば、激しい剣幕、乱暴、怒り、説教といったことしか感じられない。だが、大衆の中に入っていってこれを聴くと、何回か聴いているうちにそんなことを思わなくなる。」³⁰

紅衛兵小報の詩は政治性、集団性のきわめて強い作品であり、あの「革命時代」の昂揚した雰囲気を離れてはなおさら十分な読みも内容を理解することもできない。先にあげた「放してくれ、母さん!」、および後に『深紅の戦旗の上に書く—紅衛兵詩選』に収められた一部の詩は、すべてそのような詩である。ここでその一首を引用する。

死んだら紅い少年兵になろう／生きてる内は革命の闘将になろう。／毛主席が腰を支えてくれださるんだ／どうしてお前に腰を曲げたりするか？／血が欲しいなら／身体中の熱血をぶちまけてやる／涙だと？／流すもんか！／「自己批判書」だ？／すまんこった！／俺たち／お前たちと——／骨そのものが違うんだ！／造反派は／銅と鉄で铸造したんだ。／毛主席に従って／革命し造反する！／それが罪だと？／よし！／罪名を／もう千条並べられても／俺たちは——引き受けよう！／よく聞け、ふるえるな／最後に笑う者が／一番かっこいいんだ！／今日、この暗い片隅で／お前は我々を「裁く」：／明日を見てろ：／俺たちは高い臺に登る／周りには紅梅が咲き誇り／頭を上げて東に向えば／紅い太陽で空は真っ赤だ！／お前たち——大小のフルシュチョフをつまみ出し／皆の前で裁いてやる！³¹

かりに、「造反したために抑圧と迫害を被った」「現場」に身を置くことができるならば、こうした詩は読者（観衆）の強烈な共鳴を引き起こし、巨大な感情の衝撃力を生むはずである。「現場」から遠く離れた今日の読者にしてみれば、「大げさなだけ」であり、ほとんどいかなる芸術的感染力もないと思わざるを得ない。しかし、文革の歴史を体験した当事者が、これら当時の造反詩を読み返したならば、あるいはもっと複雑な感情の反応があるかもしれない。

まとめ

『深紅の戦旗の上に書く—紅衛兵詩選』は、当時広範な影響を及ぼした紅衛兵小報詩歌集である。首都大專院校紅代会『紅衛兵文芸』編集部が編選し、北京人民教育出版社印刷工場で1968年12月に印刷され、印刷部数は3万冊に達した。本書の収集範囲は比較的広く、全部で全国10あまりの省・市自治区の紅衛兵小報から詩作98題107首を集めており、文革初期の紅衛兵小報詩歌の一大観閲だった。『江城壯歌』と『戦地黃花』もまた、文革前期に紅衛兵組織が印刷した小報詩選である。『江城壯歌』は「鋼二司」武漢水利電力学院・「鋼工総」東方紅衛団から編集印刷された。1967年武漢で発行され、77首の詩を収める。多くの作品が、全国を揺るがした武漢「七・二〇事件」の際に書かれたもので、この大規模な流血衝突の記録となっている。『戦地黃花—八一八詩選』の編選は吉林師範大「八一八紅衛兵」『革命造反軍報』編集部であり、1968年8月18日に長春で印刷発行された。全部で63首の詩、対口詞1篇、春聯1組を収める。

しかし、『真っ赤な旗の上に書く』、『江城壯歌』、『戦地黃花』のような、全国あるいは省の範囲で紅衛兵小報の詩作を集めたものは、文革の動乱期にあってはきわめて少ない。多くの小報が紅衛兵団体とともに自然消滅し、当時はこうした資料の保存が重視されなかったために、現在の研究者は、紅衛兵小報の正確な数をまったくつかめないし、さらにはおおよその数さえ調べる手だてがない。海外では、関心を持つ人が文革期にすでに紅衛兵出版物の状況に注目していたが³²、彼らが目にしたのはおそらく総数の十分の一以下であろう。著者は北京大学図書館で600種あまりの紅衛兵小報に目を通したが、これは総数の「九牛の一毛」に過ぎないと感じた。もちろん、著者が探し集めた1100あまりの詩の中からでも、紅衛兵詩歌創作の大体の風貌は窺い知ることができるだろう。

原注

¹ 朝輝「在那天快亮的时候」、首都大專院校紅代会『紅衛兵文芸』編輯部編『写在火紅戰旗上一紅衛兵詩選』、北京、人民教育印刷場、1968年12月、84-85頁。

² 1967年2月3日、毛沢東は外賓と談話した際、「これまで、我々は農村の闘争、工場の闘争、文化界の闘争をやり、社会主義教育運動を進めてきたが、問題を解決することができなかった。その原因は、公然と、全面的に、下から上に大衆を立ち上げらせ我々の暗黒面を暴露するような、形式、方法を見いだせなかったからである」と指摘した（中央党史研究室編

『中共党史大事年表』、北京、人民出版社、1987年4月、第1版、358-359頁を参照)。

³ 牟志京「〈出身論〉与〈中学文革報〉」、徐曉等編『遇羅克遺作与回憶』、中国文連出版公司、1999年1月、第1版、219-224頁。

⁴ 例えば、ソ連の政治圧政期(30年代から70年代まで)には、権力言説に対して対抗的態度を取った「地下刊物」が大量に出現し、ノーベル賞受賞者のプロツキーなどの重要な作家を育成した(馬可・斯洛寧[マルカ・スローニン]『蘇維埃俄羅斯文学[ソビエトロシア文学]』第32章、「『薩米茲達特[サミズダート]』: 地下刊物」、上海、訳文出版社、1983年10月、第1版)。

⁵ 陶洛誦「我和遇羅克一家」、徐曉等編『遇羅克遺作与回憶』、中国文連出版公司、1999年1月、第1版、241頁。

⁶ 牟志京「〈出身論〉与〈中学文革報〉」、註3、遇羅錦「乾坤特重我頭輕一回憶我的哥哥遇羅克」、『花城』、1981年第4期。

⁷ 清華大学井岡山山兵团『井岡山』、1967年1月9日付「本報啓事」。

⁸ 北京師範大井岡山公社『井岡山』第29期「敬告読者」。

⁹ 首都大專院校紅代会『首都紅衛兵』紅十四号(1967年4月29日)の通知。

¹⁰ 北京大学新北大公社『新北大』第4期(1966年9月2日)

¹¹ 北京師範大井岡山山戦闘団『井岡山』創刊号(1966年12月9日)

¹² 中国科学院紅衛兵革命造反司令部『紅衛兵報』第3期、1967年1月11日

¹³ 西安地区紅衛兵革命造反司令部『紅衛兵』第9期、1966年12月24日

¹⁴ 「高司」湖南大学総部が出版した『紅衛兵』第21期(1967年6月10日)は、42名の「高司」学生が「長沙工連」に殺殺された事件を報道するとともに、湖南師範学院第三食堂の労働者、顔××の文章「我所看見的殺人惨景」を發表し、彼が三時間のうちに見た十数の「高司」学生殺殺の場面を記した。一方、「長沙工連」に近い「新湖大公社」の紅衛兵は、自らが主催する『新湖大』第13期(1967年11月7日)で、「高司」紅衛兵が二人の「造反戰士」を惨殺したファッショ的暴行(二人はどちらも突き殺され、生殖器が切り取られていた)を詳述し、あわせて、血まみれの死者の写真を掲載した。

¹⁵ 中国作協革命造反団『文学戦報』第24、25合併号(1967年8月20日)。

¹⁶ 朝華出版社1993年1月、第1版。

¹⁷ 楊東明「永遠跟著毛主席」、北京大学新北大公社『新北大』第12期、1966年9月30日。

¹⁸ 「我們大声為您叫好—獻給成都工学院臨時革命委員会」、紅衛兵成都部隊政治部『紅衛兵』第19期、1967年3月26日。

¹⁹ 李亮「血之歌—到全市革命群衆」、重慶紅衛兵革命造反司令部『山城紅衛兵』第7期、1966年12月23日

²⁰ 楊健『文化大革命中的地下文学』、北京、朝華出版社、1993年1月、第1版、41頁。

²¹ 同上、39頁。

²² 羅貝爾・埃斯卡皮[ロベール・エスカーピ]『文学社会学』、杭州、浙江人民出版社、1987年8月、第1版、90頁。

²³ 朱自清「論朗誦詩」、『朱自清全集』第3卷、南京、江蘇教育出版社、1988年、第1版、256頁。

²⁴ 註1、96-98頁。

²⁵ 「放開我、媽媽!」は当時各地の紅衛兵小報に掲載された。著者が見たのは、1967年7月29日吉林の新聞『長春公社』に掲載された比較的早い時期の版本であり、タイトルは「放開我、媽媽!」(もとのタイトルには句読点なし)で、作者名はなかったが、「寄自武漢」の字が書かれてあった。一年後、この詩が『写在火紅的戦旗上』に収められた際、作者の署名に「武漢吳克強」の字が加わり、詩の末尾に執筆した日付の「一九六七・六」が加えられた。

²⁶ 註23、256頁

²⁷ 向日葵、『紅太陽頌』、北京大学革命委員会『新北大』第145期、1967年12月26日。

²⁸ 野草地、『戰士的話』、長春地質学院『長春公社』第11期、1967年8月15日。

²⁹ 雲和県畚族鐘進和「畚家想念毛主席」、浙江省麗水地区革命造反連合総部『麗水戦報』第134期、1968年12月26日。

『中共党史大事年表』、北京、人民出版社、1987年4月、第1版、358-359頁を参照)。

³ 牟志京「〈出身論〉与〈中学文革報〉」、徐曉等編『遇羅克遺作与回憶』、中国文連出版公司、1999年1月、第1版、219-224頁。

⁴ 例えば、ソ連の政治圧政期(30年代から70年代まで)には、権力言説に対して対抗的態度を取った「地下刊物」が大量に出現し、ノーベル賞受賞者のプロツキーなどの重要な作家を育成した(馬可・斯洛寧[マルコ・スローニム]『蘇維埃俄羅斯文学[ロシアソビエト文学]』第32章、「薩米茲達特[サミズダート]」: 地下刊物、上海、訳文出版社、1983年10月、邦訳池田健太郎・中村喜和訳『ロシア文学史・ソビエト文学史』1976年新潮社)

⁵ 陶洛誦「我和遇羅克一家」、徐曉等編『遇羅克遺作与回憶』、中国文連出版公司、1999年1月、第1版、241頁。

⁶ 牟志京「〈出身論〉与〈中学文革報〉」、註3、遇羅錦「乾坤特重我頭輕一回憶我的哥哥遇羅克」、『花城』、1981年第4期。

⁷ 清華大学井岡山兵団『井岡山』、1967年1月9日付「本報啓事」。

⁸ 北京師範大井岡山公社『井岡山』第29期「敬告読者」。

⁹ 首都大專院校紅代会『首都紅衛兵』紅十四号(1967年4月29日)の通知。

¹⁰ 北京大学新北大公社『新北大』第4期(1966年9月2日)

¹¹ 北京師範大井岡山戦闘団『井岡山』創刊号(1966年12月9日)

¹² 中国科学院紅衛兵革命造反司令部『紅衛兵報』第3期、1967年1月11日

¹³ 西安地区紅衛兵革命造反司令部『紅衛兵』第9期、1966年12月24日

¹⁴ 「高司」湖南大学総部が出版した『紅衛兵』第21期(1967年6月10日)は、42名の「高司」学生が「長沙工連」に殴殺された事件を報道するとともに、湖南師範学院第三食堂の労働者、顔××の文章「我所看見的殺人惨景」を発表し、彼が三時間のうちに見た十数の「高司」学生殴殺の場面を記した。一方、「長沙工連」に近い「新湖大公社」の紅衛兵は、自らが主催する『新湖大』第13期(1967年11月7日)で、「高司」紅衛兵が二人の「造反戰士」を惨殺したファッショの暴行(二人はどちらも突き殺され、生殖器が切り取られていた)を詳述し、あわせて、血まみれの死者の写真を掲載した。

¹⁵ 中国作協革命造反団『文学戦報』第24、25合併号(1967年8月20日)。

¹⁶ 朝華出版社1993年1月、第1版。

¹⁷ 楊東明「永遠跟著毛主席」、北京大学新北大公社『新北大』第12期、1966年9月30日。

¹⁸ 「我們大聲為您叫好—獻給成都工学院臨時革命委員会」、紅衛兵成都部隊政治部『紅衛兵』第19期、1967年3月26日。

¹⁹ 李亮「血之歌—到全市革命群衆」、重慶紅衛兵革命造反司令部『山城紅衛兵』第7期、1966年12月23日

²⁰ 楊健『文化大革命中的地下文学』、北京、朝華出版社、1993年1月、第1版、41頁。

²¹ 同上、39頁。

²² 羅貝爾・埃斯卡皮[ロベール・エスカーピ]『文学社会学』、杭州、浙江人民出版社、1987年8月、第1版、90頁。

²³ 朱自清「論朗誦詩」、『朱自清全集』第3巻、南京、江蘇教育出版社、1988年、第1版、256頁。

²⁴ 註1、96-98頁。

²⁵ 「放開我、媽媽!」は当時各地の紅衛兵小報に掲載された。著者が見たのは、1967年7月29日吉林の新聞『長春公社』に掲載された比較的早い時期の版本であり、タイトルは「放開我、媽媽!」(もとのタイトルには句読点なし)で、作者名はなかったが、「寄自武漢」の字が書かれてあった。一年後、この詩が『写在火紅的戰旗上』に収められた際、作者の署名に「武漢吳克強」の字が加わり、詩の末尾に執筆した日付の「一九六七・六」が加えられた。

²⁶ 註23、256頁

²⁷ 向日葵、『紅太陽頌』、北京大学革命委員会『新北大』第145期、1967年12月26日。

²⁸ 野草地、『戰士的話』、長春地質学院『長春公社』第11期、1967年8月15日。

²⁹ 雲和県畚族鐘進和「畚家想念毛主席」、浙江省麗水地区革命造反連合總部『麗水戦報』第134期、1968年12月26日。

³⁰ 註 23、256- 257 頁

³¹ 佚名「造反者日志・答黑党委「審訊」、1、66- 67 頁。

³² 海外の紅衛兵出版物に関する資料には以下のものがある。

1、Lee,Hong yung,Reaseach guide to Red Guard publications,1966-1969.Armonk,N.Y.:M.E.Sharpe,1991.李洪永『紅衛兵出版物研究指南』(1966- 1969)。

2、Union Reasearch Institute (URI) ,Catalogue of Red Guard publications held by URL.Hong Kong:URL.,1970.『連合研究所所蔵紅衛兵出版物目録』。

3、U.S.Consulate General.Hong Kong. Survey of China Mainland PressDaily (approx) .1950-1977. 美国駐香港総領事館『中国大陆報刊概覧』(1950- 1977)。